

## 達摩と達磨

### 關 口 眞 大

禪宗の成立の歴史または禪宗なるものの思想の特色についての考察を試みようとする場合、當然、まず禪宗の祖師である達磨の傳記と思想とが究明されなければならない。そしてそれらのうち、祖師達磨と二祖慧可との間の皮肉骨髓の付法なるものが、そのきわめて重要な一課題として検討されるべきであろう。しかるにそれは、達磨の滅後はるかに二百五十年もしくは五百年をすぎた時代に發生した一創作話にすぎないものであつて、いささかも歴史的事實たる性格を存するものではない。すなわち、かくのごときものはむしろ潔くこれを排除し去つてみる用意なくしては、禪宗または達磨の思想の、眞髓はおろか、その皮肉にさえも接し得ないと考察される。これらについては、昨年度の本學會においてすでにこれに論及した。

しかるに、その他、碧巖録の第一則にかかけられて尊尙されてゐる達磨の無功德の公案、聖諦第一義、廓然無聖、不識

の公案などもまた、これと全く同じくいささかも史實性を有するものではないといふべく、元來が、禪宗において祖師傳の基準としてゐる景德傳燈錄及び傳法正宗記における達磨傳は、いずれもすこぶる長篇であるにかかわらず、その記述の大部分がことごとくみな單なる創作話にすぎないものであり、すなわち史實ならざるもの虚構なるものであると見受けられる。さてしからば、禪宗における祖師達磨傳のうちから、それらの事實ならざるもの虚偽なるものをおおむね排除し去つてみると、そこに何が殘されるか、いかなる實體が発見されるかについて、ここに所見を述べてみたいと思う。

結論からいへば、そこに發見されたものは、はなはだ意外にも、達磨とは似ても似つかぬ別個の人物であつたことである。また全く別個の思想であるといふことである。すなわちもし禪宗の祖師を「達磨」とし、菩提達磨 Bodhidharma を「達摩」とよぶとしてみれば、達磨と達摩とは完全に別個の人物であるべきであるといふことである。

二

達摩と達磨とが別個の人物であるとすることは、禪宗祖師の達磨の行蹟と稱する數多い創作話の虚偽虚飾の粉装假面の

記 號	人 名	書 名	菩 提 達 磨	菩 提	達 磨	菩 提 達 磨 多 羅	達 磨 多 羅	菩 提 多 羅	A. D.							
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
	記傳	伽藍傳	陽僧	陽僧	陽僧	陽僧	陽僧	陽僧	547							
	傳記	僧寶記	高師	高師	高師	高師	高師	高師	645							
	實紀	寶實紀	楞伽	楞伽	楞伽	楞伽	楞伽	楞伽	708							
	論義	非論義	南宗	南宗	南宗	南宗	南宗	南宗	732							
	記傳	徵實記	問答	問答	問答	問答	問答	問答	774							
	經傳	林壇經	寶古	寶古	寶古	寶古	寶古	寶古	801							
	譜圖	脈襲圖	內證	內證	內證	內證	內證	內證	819							
	集鈔	承詮鈔	師資	師資	師資	師資	師資	師資	841							
	疏集	大疏集	圓覺	圓覺	圓覺	圓覺	圓覺	圓覺	852							
	傳錄	僧燈錄	祖堂	祖堂	祖堂	祖堂	祖堂	祖堂	988							
	傳錄	高僧傳	宋景	宋景	宋景	宋景	宋景	宋景	1004							
	正宗	法正宗	傳法	傳法	傳法	傳法	傳法	傳法	1061							

注一 ○は「摩」字を用いているもの、△は「磨」字を用いているもの。  
注二 これらのうち、A B C D G I J L O P Qは大正新修大藏經により、Mは卍續藏により、Eは歴史語言研究所集刊第二十九輯所載胡適博士校訂本、Fは鈴木大拙博士校訂「神會和尚語錄」、Kは宇井伯壽博士校訂岩波文庫本、H Nは花園大學祖録刊行會本によつてゐる。

かけにかくれて、肝心の人物そのものがすりかえられていたということでもあつて、その變遷の経過を示しているのが、上の圖表である。

これは、達磨の傳記に關する主要なる文獻をえらんで、それをほぼ成立年代順に配列し、それら諸資料のなかに見出された達磨の名の一覽表である。菩提達磨は、普通にはまた菩提達磨とも書くとされている。そしてそれを略してただ菩提師とよんでいるのが、早く一例だけ見出だされる。が、普通にはむしろ菩提の二字を略して、ただ達磨、もしくは達磨、とよばれている。「摩」と「磨」との文字の推移は、右の圖のように表示して眺めてみると、早い時代、もしくは唐の時代、には磨の字を用いている例が多く、後世、ことに宋の時代、にくだつて磨の字を用いる例が多くなつてゐる。

ただし最も早い時代の洛陽伽藍記に磨の字が用いられていることが、注意をひく。けれどもこれはいまは大正新修大藏經第五十一卷所收の洛陽伽藍記卷第一の永寧寺の條によつてゐるのである。この大正新修大藏經所收本は、底本は如雲堂本であつて、他に六種の對校本を用いたとされているが、この永寧寺の條の菩提達磨の「磨」に對しては脚注がない。しからに洛陽伽藍記によつて達磨を論ずる場合、從來普通にこの永寧寺の條のみを用いているが、じつは別にその卷第一の修梵寺の條にも菩提達磨の名が見えている。そしてこの修梵

寺の條の達磨の「磨」には脚注<sup>③</sup>が付されていて、對校本である帝國圖書館所藏の學津討原本をはじめ、漢魏叢書、廣漢魏叢書、津逮祇書、說郛、五朝小說などの所收の諸本が、みな「摩」であると記している。この場合、おそらくは元來は「摩」であつて、後世たまたま如雲堂本が「磨」と書き誤つたのであると推考される。

しかし永寧寺の條にはこのような注記はないので、諸本ともみな「磨」が用いられていたことになる。したがつて洛陽伽藍記のなかにおいてすでに摩と磨との兩様の文字が用いられていたのかもしれない。けれども開元釋教錄卷第六にこの永寧寺の條の引用があり、そこには高麗版大藏經を底本として「摩」を用い、明版大藏經にのみ「磨」とあると脚注している。これらからして、これもおそらくは元來は「摩」であつたと推考される。とにかくこの洛陽伽藍記の一例を除けば、現行の諸文獻によつて見てさえも、はじめの三百年ほどの間の達磨傳は、すべて「摩」である。

そして「達磨」と書いてあるのは、シナでは禪門師資承襲圖、日本では内證佛法脈譜にはじまる。けれども禪門師資承襲圖のそれはいまは岩波文庫本によつたのであるが、同じく宗密(七八〇—八四一)の禪源詮集都序には達磨とある。おそらく宗密自身においてはそのように二様に書いていたのではなく、したがつてそれいづれかは後世の傳寫の間に生じ

たものであると考えられる。

しかるに内證佛法脈譜(八一—九撰)は、おそらくは宗密の諸撰述より早い時代のものかと考えられるのであるが、そのなかの達磨大師付法相承師血脈譜には、すべて達磨とある。しかも同じく傳教大師の越州將來錄(八〇五提)のなかにも、「達磨系圖一卷」<sup>④</sup>が記載されており、この越州錄は大師の親筆が國寶として現存しているから、傳教大師がすべて達磨と書いていたことは、ほぼ確實である。けれどもまた、そののちの慈覺大師の入唐新求聖教目錄(八四七撰、新脩大藏經所收本による)には、「唯心觀一卷 菩提達磨撰」<sup>⑤</sup>「達磨和尚五更轉一卷」<sup>⑥</sup>などがあつて、達磨と達磨の兩者が用いられている。惠運の將來錄(八四七撰、大正新脩大藏經所收本による)の「菩提達磨論一卷」<sup>⑦</sup>もまた、その脚注によれば、達磨が達磨となつている異本が存している。そしてさらに智證大師將來錄(八五八撰、大正新脩大藏經所收本による)になつても、「達磨宗系圖一卷」<sup>⑧</sup>「達磨和尚悟性論一卷」<sup>⑨</sup>や「達磨尊者行狀一卷」<sup>⑩</sup>「菩提達磨碑文一本」<sup>⑪</sup>などがある。

さて、祖堂集(九五二頃撰)はそれらに對しておよそ百年ほど後世に作られたものであるのに、しかもなお菩提達磨、達磨とほとんどすべて摩を用いていることが注目される。したがつてシナにおいては宋高僧傳、景德傳燈錄にまでくたつて、ようやく達磨に一定したことになるようである。

同一人の撰述もしくは同一の撰述のなかで摩と磨の兩字が用いられていたさされていることは、すこしく考えにくいことである。すなわちそのいずれかは後世の傳寫の間に生じたものであると見られることになる。この場合、後世にくだつて普通には達磨と書かれるようになってからは、その達磨を達摩と書き誤まることはむしろすくなかつたであろうし、また達摩を普通の達磨に書き誤まることの方が多かつたであろう。したがつて同一人の撰述もしくは同一書のなかで摩、磨の兩様の字が用いられている場合は、むしろ元來は達摩と書かれてあつたと見るのが穩當ではなからうか。とにかく、達磨は、唐代においてははおおむね達摩と書かれており、宋代にくだつて次第に達磨と書かれるようになったのである。

さて、それらはいずれにもせよ、菩提達摩がすなわち禪宗の祖師であるとされ、達摩がすなわち達磨なのである。すなわちいまはただちにその達磨なる人物そのものについての考察に進んでみよう。

### 三

ここにおいて、さきに掲げた一覽表のなかでとくに注意をひかれるのは、菩提達摩多羅という新しい名が曆代法實記にあらわれてくることである。すなわち曆代法實記には、  
梁朝第一祖菩提達摩多羅禪師<sup>(13)</sup>  
と標されており、しかもその菩提達摩多羅は、例えば、

釋迦如來滅度後、法眼付<sup>14</sup> 囉摩訶迦葉、摩訶迦葉付<sup>15</sup> 囉阿難、(中略) 舍那婆斯付<sup>16</sup> 囉優婆軀、優婆軀付<sup>17</sup> 囉須婆蜜多、須婆蜜多付<sup>18</sup> 囉僧伽羅叉、僧伽羅叉付<sup>19</sup> 囉菩提達摩多羅。西國二十九代、除達摩多羅、即二十八代<sup>(13)</sup>。

というがごとく、略して達摩多羅ともよばれている。しかもその菩提達摩多羅、すなわち達摩多羅、は、

菩提達摩多羅禪師者、即南天竺國王第三王子。……乃遣<sup>20</sup> 弟子佛陀耶舍一人、往<sup>21</sup> 秦地。……於<sup>22</sup> 廬山東林寺、時有<sup>23</sup> 法師遠公、問曰、……答曰、我師達摩多羅也。遠公既深信、已便譯<sup>24</sup> 出禪門經一卷、具明<sup>25</sup> 大小禪法。西國所傳法者、亦具引<sup>26</sup> 禪經序上。<sup>(13)</sup>  
達摩多羅、聞<sup>27</sup> 弟子漢地弘化、無<sup>28</sup> 人信受、乃泛<sup>29</sup> 海而來、梁武帝、出<sup>30</sup> 城躬迎。

などであることによつて明らかに知られるように、菩提達摩が全く別個の人物である達摩多羅 Dharmatata に化しおわつている。したがつて菩提達摩その人は實際には全く抹殺されてしまつていたのである。

しかも驚くべきことには、このすりかえと抹殺とが、禪宗祖師達摩傳の間においては、この一回だけでなく、ほぼ同様の手段によつてさらにもう一度行なわれている。すなわち景德傳燈錄において、その卷第三に、

第二十八祖菩提達摩者、南天竺國香至王第三子也。姓刹帝利、本名菩提多羅。<sup>(13)</sup>

といい、ここにもまた新しく菩提多羅という名のあらわれてくるのがそれである。すなわち、さきには、菩提達摩多羅なる人名を案出することにより、達摩の二字を媒介として菩提達摩と達摩多羅とをすりかえたのに對し、ここでは、かえつて達摩の二字を捨て、多羅の二字を媒介とし、達摩多羅を抹殺して、菩提多羅という新人物を登場させたのである。

## 四

この兩度のすりかえがそれぞれに資料のなかの文字の上で馬脚を露わしてきたのは、かくのごとくに曆代法寶記と景德傳燈錄とにおいてであるけれども、第一回のすりかえが行なわれたのは、じつは南宗定是非論においてであり、第二回のすりかえは、じつは寶林傳においてである。

南宗定是非論においては、菩提達摩多羅や達摩多羅という名はいまだ用いられてはいないけれども、實際にはひそかにその人物のすりかえと菩提達摩の抹殺が行なわれていたのであつて、その動かすべからざる證據は、南宗定是非論に、

達法師問、唐國菩提達摩既稱其始、菩提達摩、復承誰後、又經幾。和尚答、菩提達摩、西國承僧伽羅又、僧伽羅又承須婆蜜、須婆蜜承優婆崛、優婆崛承舍那婆斯、舍那婆斯承末田地、末田地承阿難、阿難承迦葉、迦葉承如來付。唐國、以菩提達摩、而爲首、西國、以菩提達摩、爲第八代。

といい、いわゆる西國八祖説を立て、菩提達摩を西國第八祖

であると稱していることである。すなわちこの西國八祖なるものは、これ全く達摩多羅禪經序の所説に外ならないからである。しかも神會みずからもまた、

慧可禪師、親於嵩山少林寺、問菩提達摩西國相承者、菩提達摩答、一如禪經序品所説。

とまでいつている。これは、慧可の問に對して達磨の答えたところが全く達摩多羅禪經序と同じであつたというのか、または達磨が、それは達摩多羅禪經序に説かれているとおりである、と答えたというのか、いずれとも明瞭ではないが、いづれにせよ、神會は慧可の問、達磨の答なるものを捏造し、彼が達摩多羅禪經によつて創作した西國八祖説をこれによつて權證あらしめようとしたのである。神會（六六八—七六〇）は、さらにこの南宗定是非論のなかにおいて、達磨の袈裟が代々相傳されることによつて禪宗正統の第二祖第三祖乃至第六祖が決定したとする、いわゆる六代傳衣説をも捏造した。そしてそれについて慧可が質問し達磨がそれに答えてそれを保證したとする達磨、じつは達摩多羅、と慧可の問答なるものを捏造して、それらを連結させたのである。

六代傳衣説が神會の捏造であり大説であることは、かつて胡適博士が指摘したところである。また、それに伴う北宗排撃がすべて彼の創作話であつて、その卑劣俗惡さは禪宗史の上の拭りべからざる汚辱であることは、かつて宇井伯壽博士

が禪宗史研究において批評されたごとくである。しかもなお神會や六祖壇經の思想において禪宗として取るべきものがあるかのごとき論をなす學者があるが、論者の所見によれば、とくに取るに足るべき思想はほとんど存していないと考えられ、また禪宗がそれらの所説に見られるごとき俗惡低級なるものであつてはならないとさえ思われる。事實として、禪宗は、神會の系統においては眞の發展はなく、かえつて神會が眼中にもおかなかつた南岳、青原の系統において洪州宗、石頭宗となつて發達し、それがやがて五家七宗ともなり臨濟宗、曹洞宗にもなつた。それらがすなわちいわゆる南宗禪であり、またそれがすなわちわれわれが目している禪宗である。

すなわち神會が創作した西國八祖説、六代傳衣説は、けつして禪宗の祖師の思想をあらわそうとしたものではなくて、じつはもつぱらただ神會自身が佛祖の正統の繼承者であることを主張せんがための卑劣なる捏造であつたのであるが、しかもその提造の虚偽は西國八祖説、六代傳衣説のみでなく、このように祖師達磨そのものの上にも及んでいたのである。すなわち神會はついに不敵にも菩提達磨その人を抹殺して憚らなかつたのである。

そののち、しかも曆代法寶記ののちにも、宗密(七八〇—八四一)が圓覺經大疏鈔卷第三二之下の達磨傳で、達磨を達磨多羅とよんでいるのが見出だされる。<sup>(18)</sup> これもおそらくは曆代法

寶記を承けたと見るよりは、直接に神會の南宗定是非論に由来しているのであろうと推考される。すなわち圓覺經大疏鈔のなかには、曆代法寶記の引用は見られないで、しかも南宗定是非論が引用されていることと、宗密はことに神會の嫡流をもつてみずから任じて南宗北宗の是非邪正を論じた人だからである。

## 五

神會が創作した達磨多羅の達磨は、達磨多羅禪經一卷についての思想の見地からの處置に窮したことに於いて、やがて破綻を生ぜざるを得なかつた。すなわちそれはいわば大小乗の禪觀をまじえ説くものであつて、達磨の所説とするにふさわしくない。いわんややがて不立文字の思想が發達して、まずこの達磨多羅禪經が捨てられなければならない、したがつて必然的に達磨多羅の達磨が捨てられなければならないことにもなつた。そしてそれに代つて、ここに菩提多羅という新しい達磨が登場させざるを得ないことにもなつたのである。また、西國八祖説もたちまちに種々の矛盾をきたし、それを糊塗するために各種の西天二十八祖説が創作されることとなり、さらにはまた、祖師達磨以來、代々祖々、金剛般若經を傳へることによつて禪宗正統の二祖三祖乃至六祖が決定したとする神會の中心主張までが全く捨て去られて、いわゆる教外別傳を標榜したとする新しい達磨が出現せしめられること

にもなつた。そしてこの達磨、すなわち菩提多羅は、じつは新しい禪宗思想の理想像として案出された架空の人物であるごとくである。

つまり、本名が菩提多羅であるという達磨は、禪宗史上、景德傳燈録においてははじめて登場する。景德傳燈録には、さきに引用したごとく達磨の本名は菩提多羅であつたと明記されており、師の般若多羅から、汝は諸法においてすでに「通量」することを得た、達磨という語には「通大」という意義がある、汝はよろしく達磨と名を改めるがよい、といわれて、そこで菩提達磨と號せられることになつた、といつてゐる。

このようにして本名菩提多羅という達磨がはじめて出現したのであるが、しかもその師は般若多羅であつたとされている。達磨の師は、南宗定是非論、曆代法寶記、圓覺經大疏鈔などにおいては僧伽羅叉であり、六祖壇經においては須婆蜜多であり、内證佛法血脈譜においては優婆闍であるとしている。すなわち景德傳燈録において、達磨の師を般若多羅としていること、また達磨の來朝の日時が普通八年九月二十一日で、梁ノ武帝と寶誌とが問答し、魏ノ明帝の勅召を受け、楊銜之に説法し、太和十九年十二月五日に遷化したとすることなど、それらは全く寶林傳に見られる達磨傳にほかならない。そしてそれらはみな寶林傳においてははじめて見るところのものであり、寶林傳以前には見られないところのものであ

つて、すなわち寶林傳の創作であつたと推考される。寶林傳においては、菩提多羅という名は與えられておらなかつたけれども、景德傳燈録における達磨の傳記の大體はほぼ創作されてゐることが知られる。すなわち禪宗祖師の達磨は、じつは寶林傳において誕生せしめられたのであると見受けられる。すなわちまた、その菩提多羅なる達磨、禪宗祖師としての達磨は、菩提達磨とも達磨多羅ともほとんど全く無關係に、自由に創作された傳記であり、すなわち全く新しい架空の映像なのである。

しからば歴史的事實としては、禪宗は、達磨の道を傳へてゐるものではなくて、かえつて禪宗なるものの發達がやがてそのような達磨傳を創作したのであり、すなわち禪宗がかえつて達磨を生んだのである。

およそ一宗の祖師たる人物の傳記において、後世にくだるにしたがつて次第に増廣され修飾されて神異的要素を増すことは、普通に見られるところではあるが、禪宗祖師の達磨のごとく、その祖師そのものが全く別個の人物とすりかえられているときは、きわめて稀有の事例であり、おそらくは他に絶無の事例であろう。

さてしからば、そのような全くの新人物の菩提多羅、すなわち禪宗思想の象徴としての達磨を生み出した禪宗なるものは、實際には、いつ、どこから發生し、かつ、いかにして

成立したものであつたかという問題が、改めて禪宗の最も重要な課題となつて今後研究されなければならないことになるであらう。これらに關しても、いささかの所見はあるが、いまはそれには論及しない。

## 六

そしていまはただ、禪宗祖師の達磨と菩提達磨とは、菩提達磨と達摩多羅とが全く別個の人物であつた以上に、さらに別個の人物であるとするべき所以を明白にしておくにとどめる。しかし菩提達磨と禪宗祖師の達磨が全く別個の人物であるとの見地に立ち得たときにおいてのみ、例えば、洛陽伽藍記においては、達磨は、洛陽の伽藍の金盤が日光に眩いて雲表に照り、寶鐸の響きが風を含んで天外に出ずる精麗さに感激して、口に南無となえ、合掌すること連日であつた、といわれており、それに對して、禪宗祖師の達磨が、梁ノ武帝に寺を造り僧を度する功德を問われて、ただ一言「無功德」と喝破した、とされているごとくに、その思想や性格がはなはだ相違している所以が了解されるのである。

同じく、菩提達磨は、續高僧傳によれば、遊化を務めとしたりとされ、一所に定住しなかつたと見られる。それに對し、禪宗祖師の達磨は、嵩山少林寺に入つて面壁默坐して座を起たざること九年といわれる、また菩提達磨の達磨は、續高僧傳、楞伽師資記及び奈良朝古文書などによつて見れば、全く

楞伽經の傳通者である、四卷楞伽經の注釋があつたとされる。それに對し、禪宗祖師の達磨は不立文字、教外別傳を宗としてとされる。ことには、菩提達磨の思想はただ二人四行のみによつて知られるのに對し、禪宗においては、達磨の道は慧可の禮拜得髓のところのみあり、二人四行のごときは、到底、達磨の道と見るには堪えないといつて、菩提達磨の思想が全く否定されてしまうことにもなつていたのである。

すなわち菩提達磨の達磨と禪宗祖師の達磨とは、その傳記においても、その思想においても、むしろ正反對とも見るべきまでに相違しているのである。

したがつて、このようにまで相違しており別個である菩提達磨の達磨と禪宗祖師の達磨を、盲目無批判に同一人としてなされていた從來の禪宗史の研究や禪思想の研究は、いまや一度は潔くそれらを放擲し、禪宗の虚偽ならざる本源の開明に進むことが必要なのではあるまいか。

- 1 正藏五一、p. 1000c. 2 同、a. 1004a. 3 同、p. 541c
- 4 傳教大師全集、四、p. 713 5 正藏五五、p. 1084a. 6 同、p. 1085a 7 同、p. 1088a 8 同、p. 1094a. 9 同、p. 1095a. 10 11 同、p. 1101a. 12 同五一、p. 180c. 13 同、p. 180a. 14 同、p. 180c. 15 同、p. 217a 16 17 歴史語言研究所集刊二九、下 18 卍續藏一、一四、三、二七六左。

(右は文部省科學研究費による研究の一部である。)